

「なかまとともに豊かな生活をつくる」

～ 寄宿舎実践で大切にしてきたこと、これから大切にすること ～

1 はじめに

(1) 今回の取り組みのねらい

- ・これまでの寄宿舎実践で大切にしたり魅力や新しい世代とともに深めていくこと。
- ・これまで大切にしてきたことを学部実践とともに深めていくこと。

(2) 研究（実践のまとめ）の経過

- ・1年目（2012年）—担当者で論議。全校的な提起をうけて寄宿舎で検討。「どう捉える」「何を深めていくのか」という点も含め、寄宿者の「キャリア教育プロジェクト担当者」で検討を始めました。
- ・2年目（2013）—寄宿舎で論議。
「これまでの本校で大切にしてきたこととどう違うのか」「労働教育や作業学習などの概念とどう違うのか」などの意見がでました。
- ・3年目（2014）—これまでの寄宿舎のレポートなどから深めていくことに。渡辺論文（今取り組んでいることの総体がキャリア教育）などから、「そもそもキャリア教育をどうとらえるか」について深めました。
- ・4年目（2015）—レポート論議。

(3) 寄宿舎におけるキャリア教育を考えると大切にしたい視点（学習や論議をとおして）

1) 「キャリア教育のそもそも論から考えていく必要がある」という視点

- ・そもそも出発は、文科省による「ニート、フリーター」といわれる人々への就労という観点から出発した。「非正規雇用」などの低賃金、劣悪な労働条件などを改善するのではなく、むしろ、その条件下で「自己責任」を果たす方向をめざすところからキャリア教育が始まったことは押えておく必要がある。たとえば、運営費交付金の格差配布、利潤を生み出す研究優先、就職率などの数値目標を評価対象とするなど、大学のキャリア教育の実情は、その具体例である。

2) 「キャリア教育は、スキル（就労するための出口のスキル）だけでなく、人間力（人格的な力）を高めていかなければならないということですね。」という視点 —若い先生からの発言から—

- ・出口としての受験だけでなく、ライフキャリア・ライフプランニングなどと普通教育では、問い直しが始まっているが、支援（障害児）教育は、そもそもその視点でやってきたこと。
- ・未就学児をなくす運動・障害児学校建設の運動の際に、投げかけられた「この子らに教育は必要か」という疑問を、「すべての子どもたちの人格形成のための全面发展」という実践で答えた、（京都の）障害児教育実践を、いま「格差社会」「子どもの貧困」など厳しい環境の中で問い直すことが大切である。
- ・通常の子どもたちの多くが、高等部教育だけでなく、専門学校や大学教育を経て、社会にでてゆくのに対して、障害のある子どもたちが、18歳で進路を決定していくということはこれでいいのか、という出口を固定的に観ない視点も必要である。（固定的に観ることでのゆがみに気づくことの大切さ）
- ・そのような観点から、今のきびしく、複雑な社会のなかの子どもたちの願いにこたえる実践をみんなで行うことが求められている。

3) 「キャリア教育のことはむづかしい。—ことばを大事にしていく」視点

- ・では、ことばを大切にしていくということはどういうことなのか。
 - *子どもたちの現実の姿や実践のリアリティのある悩みを含む実践者のことば。
 - *実践者の立ち位置を貫くことば。
（「すべての子どもたちに」「発達」「生きる権利としての障害児教育」「子ども時代を生きる」など）
 - *学部や保護者の方に伝えていくことば。
「なにを」「どのようにつたえるのか」
などを、大切にしていくこと。

2 キャリア教育にかかわる 寄宿舎のテーマについて

(1) テーマについて

—なかまとともに豊かな生活をつくる—

- 1) なかまのなかで自分らしさが
ふくらむ生活を大切に
- 2) なかまとともにつくる生活の喜びを大切に
- 3) 発達に必要なあたりまえの生活を大切に
- 4) 人と支え合いながら
生活を主体的につくることを大切に

(2) テーマについての補足

- ・テーマの中の「なかま」や「豊かな生活」をより具体化するための4つの項目を置きました。
- ・「寝泊まりのある生活」「なかま（集団）との生活」の二つが、テーマのキーワードです。
- ・「なかま」という言葉は、共同作業所作りの取り組みを通して生まれた言葉で、「友達」というより、人と人との深い関係をさす場合が多い。寝泊まりのある豊かな関係という意味で、「なかま」という言葉を使用しています。
- ・同じく「生活」という言葉は、「経済活動や衣食住の習慣、手段など日々の営みの具体的な側面」に関して用いられることが多い。一方、暮らしとは、「癒し、安らぎなど生活のあり様」までを含む広い意味を持ちます。「豊かな生活」という言葉の中に「生活のあり様（ほっこり、ゆったり）」などの意味合いを込めています。
- ・テーマを設定するうえで、全校テーマ「自分らしく、人とともに、今を生きる力を」を視点にしました。
- ・テーマ設定に対し、各学部では、授業づくりを通して何を大切に実践していくのかを検討したのに対し、寄宿舎では、子どもたちの姿や具体的な取り組みを通し、振りかえるために、この数年間の「子どもたちのほんとうの願いを大切に実践しよう」という、年度毎の実践エピソードやレポートを検討しました。
- ・全校的な研究テーマや教育課程との関係では、小学部—中学部—高等部のそれぞれの時期でのねらいを系統的に検討したものであり、寄宿舎のテーマは、それら12年間の各学部と並列、土台としての位置づけになると考えます。

3 取り組みを通してわかってきたこと

- (1) なかまのなかで自分らしさが
ふくらむ生活を大切に

1) 自分らしい、その人らしいってなんだろう

「全校テーマ」の「自分らしく生きる力」とかかわる視点です。私たちは、寄宿舎の暮らしの様々な場面で、「その人らしさがみえる」「自分らしくすごしている」姿に出会います。ところで、具体的な場面では、切り口の角度や見方によっては、その捉え方がずいぶん異なります。たとえば、「部屋でゲームをしている」姿をどう考えるのか。グループ会議などで論議になります。「ほっこりしている」「彼の趣味」「みんなと遊びたいけど向かえない」。その場面をどのようにとらえ、その子のほんとうの願いと私たちの思いとかかわって、どう指導していくのか。そういう意味では、実践的な出会いでもあります。具体的な子どもたちの姿や取り組みを振り返りながら考えてみたいと思います。



だれもが楽しめる寄宿舎キックベースボール

2) 「先生、Aが、グローブを買ってほしいって言ったんですよ」（A君の両親の言葉から）

夏の家庭訪問のときに、A君の両親が、話されたことばです。「小さいときに父が何度かキャッチボールをやりたくて誘ったけれど見むきをしなかったのに」と、うれしそうに話されました。A君は、高等部になって初めて通年入舎に挑戦しました。中学部の時の運用入舎では、寂しくて週末には母に電話をしたり、高等部1年生の運用入舎では3日めに家に帰ってしまったほどでした。なので、はじめは、ゆったりしたスケジュールを組み、A君も休憩時間は大好き地図や旅行本などを読んで過ごしていました。ところがなれてくると、自由時間を、部屋で過ごすだけでなく、友達が野球をしているのを見学したり、先生とキャッチボ

ールをしたり、簡単なゲームに参加したりしながら、少しずつ、みんなと過ごせるようになりました。その過程のなかで、グローブを家でお願したのです。

「自分らしさ」との関係で考えると、「部屋でゆっくり過ごすこと」も「みんなと野球すること」もA君にとっての「自分らしさ」であり、その時の自分の気分や疲れ具合によって選べることそのものが、「自分らしく生活するすがた」なのだと教えられました。

3) 「大丈夫やで、みんな はじめはそうやから」(B君の卓球の実践から)

B君は、とても人当たりもよく、お笑いの話題など大人と楽しくかかわることができます。そのことを大事にしつつ「自分の思いも含めて人とやり取りしてほしいな」というのが、わたしたちの彼への願いでした。そこで、人との具体的なかかわりを作れないかということで始まったのが、卓球でした。はじめは、先生に誘われてやっていたのですが、上手くなるにつれ、夜の休憩時間に、自分から卓球台を用意するというように積極的になってきました。勝ち負けを競うのではなく、二人で何回ラリーできたかを楽しむ取り組み。B君は、夕方になると気になる先生や強そうな先生に声をかけ、ゲームを楽しみます。その回数を廊下の壁に張り出すようになってから、先生たちも必死です。その必死さが面白くて、みんなが集まってきます。B君は、子どもたちに声をかけ、子ども同士のかかわりも広がり、一つのブームとなりました。卓球がうまくなる、凄いサーブができるというより、むしろ、二人で何回続くのか、必死に声かけしながらやっている姿に動かされるものを大切にしてきました。B君はとても上達が早く、失敗する友達や先生相手に「大丈夫やで、みんなはじめはそうやから」とか「先生は、サーブはうまいけど、かえすときに気をつけて」など、思いのこもったやり取りもできるようになってきました。何をやっているのか覗きこむ人、応援する人、自分もやってみようかと挑戦する人、自由時間の自由参加の、グループを超えた夕食後の楽しいかかわりが生まれました。

4) 「自分らしさ」って、 「自分のなかだけに完結しないもの」

「自分らしさ」ということは、これまでの暮らしの中で自然に織り込んできた、好きなことや得意なこと、自由時間にやりたいことを大切にすることです。たとえば、A君にとっての「地図の本や旅の本」を眺めたり読んだりしながら過ごすこと、B君にとっては「お笑いタレントをネタ」に人とお話をひろげることなどです。それは、その生徒が

これまでの自分史のなかで選び、獲得してきたその行為として大切にする必要があります。

同時に「自分らしさ」を大切にすることは、「新しい自分らしさ」を獲得することでもあります。友達との暮らしのなかで、「あれをしてみたいな」「〇〇君みたいに～してみたいな」という思いを育てつつ、「新しい自分づくり」に挑戦することです。「自分らしさ」を固定的にとらえるのではなく、豊かに変化するものとしてとらえる必要があります。

そして「自分らしさ」が、自分のなかだけでなく、楽しみながら、人との関係のなかに開かれてゆくとき、広がりを持った「自分らしさ」になっていきます。仲間に認められ自分を求めていく、自分を認めてくれる仲間を信頼していく、そのような、より確かな「自分らしさ」を大切にしたいものです。

(2) なかまとともに生活をつくる喜びを大切に

1) 寄宿舎生活の「窮屈さ」や「不自由さ」を超えていくものはなんだろう

寄宿舎での生活の不安を聞くと、よく出てくる声があります。「好きなテレビが見れない」「ゲームが制限される」「早く寝かされる」。「窮屈そう」「不自由や」という声もあります。では、子どもたちが、自分自身で、あるいは家族や先生に後押しされながらも、寄宿舎生活に踏み出そうとする思いはなんでしょう。

通年生が、ある時期から寄宿舎の生活になじんでくる、生活できるやんという自信めいたものがみえてくることがあります。保護者から、最近なんかたくましくなってきましたという声を聞くようになります。そのような子どもたちの変化からみえてくるのが、友達との関わりの広がりや深まりです。いくつかの子どもたちの姿を振り返ってみます。

2) おれ、ほんとうは、どうしたらいいかわからへんねん (C君のレポートから)

「ぶっちゃけトーク」の実践です。付き合いを始めた異性ととの二人だけの世界への閉じこもり、異性へのじゃれあいのような暴力的なかかわりになっていくC君。また、友達への横柄な振る舞いについて、周りの先生や友達から注意されても、なかなか、素直になれず、聞く耳を持たなかったC君。自分だけで解決しようとするのではなく、みんなのなかで、二人の関係も育ててほしいという思いから、執行部の活動や、執行部活動の後半にバレーボールをするなど、集団の中で彼らを受け止めようとするのを大事に

取り組みました。

そんなある日、夜寝る前に、友達といろんな話をするようになってから、少しずつ自分の思いを出せるようになってきました。「ほんとうは、彼女とどう付き合っているかわからない。だから、あんなふうに出ちゃうんや」と相談する姿が見られるようになってきました。

小・中学時代のいじめられた体験や人との関わりの困難さから、自分のなかに閉じこもったり、逆に乱暴なかかわりになったりする子どもたちがたくさんいます。そんな子どもたちにとって、遊びや夕食やお風呂や寝泊まりのある寄宿舎生活をしながら、ぶつかり合い、たがいの弱さをも出しあいつつ、実感的な安心感を支えにしながら、相手を信頼し、自分への肯定感を育てることの大切さ。「ぶっちゃけトーク」の実践はそのことを教えてくれました。



サツマイモ作り：寄宿舎の畑で

3) D君をたのしませるための競争

(車いすのD君のエピソードから)

もう一つは、車いすの友達のエピソードです。自分の思いをことばで伝えることは難しいD君。それゆえ、誰もが気にかけてくれます。「今、発作あったで」とか「なんか笑いはった」とか指導者に伝えてくれます。

ある日、誕生日プレゼントに「音の出るおもちゃ」をもらってから、それでは、僕たちもD君を楽しませようということで、ちいさなブームが生まれます。タンバリンを顔の前で、バンバン叩く友達、ギターをF君の机に乗せる友達、「まあきいてみいや」とばかり、iPhoneのイヤホンでD君の耳に強引に装着する友達、練習中のギターを聞いてやといって弾いてくれた友達。

障害の重い友達の喜びをみんなでさがす楽しみ。また、その関わりに応えるかのようなD君の笑顔。先生に言われた課題ではなく(もちろん、指導者は、D君の障害や好きなことを具体的な場面で伝えながら)、生活のなかから、

誰からとなく始まったブーム。そのD君の喜びを共有しながら、お互いが大事にされる実感が広がったように思えました。

4) 仲間の中かで育つ喜びの実感を大切に

①仲間と過ごしながら、人を大事にする、人に大事にされるという実感を育てること

子どもたちのそだちのなかに、やはり友達とのかかわりがとても大きなものとして見えてきます。

自分を肯定する気持ちや人への安心感が薄い子どもたちにとって、寄宿舎生活は大切な場所だと思います。人を大事にすることや自分を大事にされることを友達との生活のなかで実感できることが大事です。音の好きなF君の楽しみをひろげようとする友達の姿は、そのようなお互いを実感として認めあうことの大切さを教えてくれました。落ち込んでいる友達にさっきまでいら立っていた友達が慰めてあげる姿、また、誰かがけがをしたり、熱を出した時に喧嘩やふざけをひとときやめて、静かな時間をつくりだそうとする姿や病気の友達を見舞おうとする姿。そのような仲間との生活づくりを大切にしていきたいと思います。

②仲間の中かで響き合う楽しさの実感を育てること

生活のなかで生まれる仲間との喜びを大事にしていくこと。一人ひとりの思いをみんなのなかで共有すること、そんな姿が生活のなかで生まれます。いつもは緊張して集団に入れたい友達がAKBのダンスを支えに友達の輪に入って生き生きと踊る姿、また、時代劇好きの友達の思いをカラオケの取り組みで認める友達集団の姿、あるいは食器運びじゃんけん、掃除場所じゃんけんなど、生活を楽しくする工夫や知恵。自分の思いを出しあい、ぶつかりあい、認めあってゆく暮らしの響き合いを、その楽しさをこれからも大事にしていきたいと思います。

③友達に安心して気持ちをあずけられる実感を育てること

友達に自分の弱さを含めて相談できる関係をつくることは簡単ではありません。納得やルールで始まるものでもありません。仲間との暮らしのなかでゆっくり醸成されていくものです。ギャングエイジの悪戯の共有、秘密の共有、ルールのある遊びやゲームを通したつながり、生活を楽しくするための工夫などのうえに生まれるものです。また、執行部活動など共通の取り組みを通した行き違いや協力。C君の「ぶっちゃけトークの悩み相談」はそのようななかで生まれました。たくさんの友達との体験、失敗を含め、仲間と経験を積み重ねながら、子ども同士の実感的なつながりを大事にしたいと思います。

(3) 発達に必要なあたりまえの生活を大切に

1) 「(寄宿舎で) なによりもうれしかったのは、なにげない生活だった」

家族に向かう暴力が原因で通年入舎したE君の一年を振り返って書いた作文の中の言葉です。クリスマス会や新年会など楽しかった行事、執行部活動、友だちとのソフトの練習、自己目標2000回やりきった懸垂の取り組みなどを振り返りつつ、みんなの前で読み上げた「なによりもうれしかったのは、なにげない生活だった」という言葉。この言葉に込めた彼の思い。子どもたちにとっての「あたりまえの(なにげない)生活そのもの」の意味を考えるきっかけとなりました。



みんなで散歩：ジャブジャブ池を目ざして

2) E君は、なぜ「あたりまえの生活」を望んだのだろう。

彼の家庭内暴力は、現象的には「自分の思い通りにならない」と物を壊したり、母に向かう暴力となってあらわれました。しかし、彼の本当の願いは、「自分の思いを暴力で解決するのではなく」「(周りの人の支えをえながら)自分自身の力で乗り越えたいという思い」があるのだととらえ、寄宿舎では、家庭の問題も含め、彼自身が考え、乗り越えていくことを大切に考えました。実際に、大好きな野球をめぐるトラブルや進路への不安などがありましたが、指導者や家族の支えをえながら、なんとか自ら解決しながら乗り越えていきました。

寄宿舎での生活やクラブや行事や生徒会活動など学部の活動を通して、自分の思いを家族への暴力という形で伝えるのではなく、周りに相談しながら解決する力が育ちました。その取り組みを振り返りながら、「なにげないあたりまえの暮らし」は、彼の気持ちの揺れや不安と緊張を柔らかく受け止めほぐし支えてきたのではないだろうか。

ご飯を食べ、お風呂に入り、しっかり体と心を動かした快い疲れのなかで眠ることのできる生活。団らんがあり、

ちょっとしたいさかいがあり、仲直りがあるあたりまえの生活。安心して甘え、安心して失敗して、安心して歯目はずし、安心して怒られるあたりまえの生活。落ち込んだときにうけとめられ、がんばろうとする思いが支えられる生活、それらが、彼が望んだあたりまえの生活(なにげない生活)だったのでしょ。

E君の家庭内では兄弟への暴力を避けるために、それぞれの家族が別々の時間に食事をする状態であったことを思い起こすときに、彼の暴力への対応であったとはいえ、「なにげない生活そのもの」を、彼がいかに望んでいたのかということと、その彼の思いに応えた寄宿舎生活であったのだと気づかされました。

3) 「あたりまえの暮らし」って何だろう。

では、それぞれの子どもにとっての「あたりまえの生活」とは、どのような生活なのでしょう。

「あたりまえの生活」という時、子どもも職員も自分が育ってきた環境や憧れの生活を含めたそれぞれにとっての「あたりまえの生活」のイメージを持っています。それゆえ、具体的な生活場面の指導では、私たちは、子どもたちとも、指導者の間でも、暮らしのありようについて、どのように考え、どのように子どもたちに伝え指導していくのか、論議の必要に迫られる時があります。

そして、その時に軸となる視点が必要になってきます。今日のように、暮らし(家族)のありようが流動的で多様であるとき、「あたりまえの生活」を「暮らし(家族)そのものの形態や在り方」に求めるのではなく、「それぞれの子どもの発達に必要な家庭環境や地域の生活」してとらえる視点です。「子どもが、人格的かつ調和のとれた発達のために、暮らし(家庭、地域)環境において、幸福、愛情および理解のある雰囲気なかで(子どもの権利条約)成長できているのか、そのような生活が保障されているのか」というとらえ方が大事になります。

具体的には、次のような取り組みがあります。肢体不自由児のFさんが、一週間入舎してきた時のことです。母は、娘の初めての寄宿舎生活に困らないように、毎日の服をコーディネートも考え、曜日ごとの服を袋に入れ、準備していました。舎では、母の思いを受け止めつつ、その子にとっての「豊かなあたりまえの生活」とはなんなのかという論議を経て、Fさんが毎日、自分で着たい服を選ぶことを大切にしました。結果的に、その子は、自分の服を自分でコーディネートすることを楽しみにすごしました。

E君の作文の中のことばもFさんの服選びの実践も、「(発達に必要な)あたりまえの生活」について多くの事を教えてくれます。生活は与えられるのではなく、子ども

達の中の発達への欠乏感や願いの中にあるのだということ。それを、子ども達の思いとして受け止めながら、これからの寄宿舎生活を作っていくことの大切さを実感させられました。

(4) 人と支えあいながら生活を主体的につくることを大切に

1) 自立するってことはどういうことなのだろう

「一人立ちしてほしい」「自立してほしい」という私たちの願いは、ともすると、「社会的自立」（一人で生活できるように）「経済的自立」（一人で働けるように）という「自己責任」「狭義の自助自立」（人のお世話にならない）という方向に傾いてしまうのはなぜだろう。

「誰の力も借りずに自立するということ（自己責任論）」という視点でなく「周りの人に助けを求めながら（支え合いながら）自立していく」視点に立って子どもたちの暮らしや生活を作っていくことはどういうことなのだろう。

「（人と支え合いながら）、生活を主体的につくる」ということを、深めるために、実践を振り返りかえることにしました。

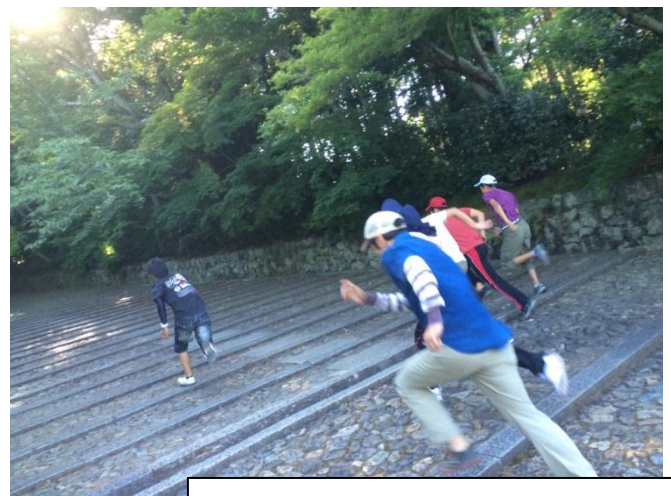
2) 部屋の壁の落書きに込められたG君の願い

G君の「落書き事件」のエピソードです。ある日、タイガーの部屋の壁に鉛筆で落書きがしてありました。よく見るとそれは、毎日の夜の集いのなかで行う部屋決めや仕事決めの「表」のようでした。夜の集いの司会は執行部のメンバーが進行していました。G君は、入舎当時、場面によっては、話せるのですが、みんなの前では、固まってしまう、話すことが出来ずに黒板に字を書いて思いを伝えていました。そんなG君が、「自分も、高等部のお兄さんのように前で司会をしたい」という思いが、落書きになったのです。落書き自体は、もちろん褒められたことではありませんが、憧れを生み出し、要求を育てたその生活集団の持つ意味について考えさせられました。彼のコミュニケーション手段の広がりが高まり（書き言葉だけでなく話し言葉）は、集団のなかの生活のなかの要求によって生まれ育って来ました。生活のなかで生まれる憧れやそれを伝えようとする安心やそれをうけとめる共感をこれからも、寄宿舎生活のなかで大切にしていきたいと思います。

あこがれを育てつつも、自信がないという生徒にとって、先輩や同じグループの友達の取り組みに励まされ、寄宿舎生活に挑戦したり、公共機関をつかった通学や電話使用を始める姿もまた、仲間とともに自立していく姿として、これからも大切にしたいものです。

3) 「この街でこの子といっしょに暮らしたい」（Hさんのお母さんの思い）

重度の肢体不自由のHさんの、特に小学部の高学年から卒業までの12年間の育ちからいろんなことを学びました。その根幹として大事にしたことは、大人や友達とのかかわりの中で「Hさんの内面の思い」でした。学部の取り組みと連携しながら、自分の思いをいろんな交通手段を通して伝えられること、特に、寄宿舎では、いろんな人に思いを伝えながら寝泊まりできる力を大事にしました。その力の広がりや大事にしつつ、成長に伴う側湾など身体の変形や運動レベルの現象的な後退をふくめ、介助や通院など具体的に家庭の暮らしを支えるような具体的サポートや寄宿舎入舎をクラスと連携しながら工夫してきました。そのなかで、お母さんの思いにも変化が生まれました。「自分が（責任を持って）Hを育てる」という思いが、「この地域のなかでこの子を育てる」という願いに発展しました。その願いを受けて、学部、進路、寄宿舎、福祉などが、いっそう連携しながら、この地域での暮らしを実現してきました。12年間の実践の継続しながら作り上げた実践という点でも、クラス、進路、地域福祉などのネットワークを積み上げながら作ってきた実践という点でも多くのことを学んだ実践でした。



階段ダッシュ：近くの神社までの散歩

4) 生活を主体的に作るということと周りの集団や人たちの響き合いとを結びつけながら

生活を主体的に切り開くことは、発達の主人公としての子どもたちの活動を大切にすることです。G君のコミュニケーションの広がり（寄宿舎の新しい友達とも話をしながら思いを通わせることができる）を生み出す原動力はG君自身の内からの思い（ほんとうの願い）を太らせることでした。また、Hさんの生活を切り開く力は、泣くことを含めた表情や指さなど、誰とでも思いを伝えようとする内面の思いの強さでした。生活を主体的につくるということは、

発達的主人公の子どもたちの課題や願いを、生活のなかに組織することです。

同時に生活を主体的につくる力を育てるときに、家族や友達や先生等の他者の存在は不可欠です。そして、どちらかが一方的に支える関係でなく、支え合う響き合うひとつの関係性が必要です。G君の場合も、周りの人たちによって、君の自立のためのあこがれを育てられたことと、G君の話し言葉でのかかわりによってまわりも楽しみかかわりが広がってゆく、そのような相互的な関係が生まれました。また、Hさんの場合も、Hさんの人との関わりの広がりは家族や友達や先生の存在のなかで生まれましたが、Hさんの育ちがまた「母の思い（この街でいっしょに暮らしたい）」を育てることに、また学部や寄宿舎の友達との関係を広めることになったのです。自立ということが、一人の行為でありながら、他者の存在を通してなされ、その両者に新たな関係が生まれることによって、いっそう確かなものになっていくことだということを学びました。

生活を主体的につくっていくときに、Kさんの育ちのように、本人や周りの人の支えだけでなく、福祉や医療などやはり社会的な関係によっても支えられています。そういった意味で、社会的な関係が、固定的なものでなく、それぞれのケースに応じて必要な関係が豊かになっていくことも、自立にとって不可欠だということを大切な視点として押えることができます。

4 これからの課題について

(1) 「自分らしさ」が生活のなかで発揮されるという視点を持って

実践を通して、自分らしさが、その人の中で完結されるのではなく、友だちとの生活の中に「自分らしさ」がひろがっていくことの大切さを押さえてきました。今後、「自分らしさ」が、この時代を生きる誰もが享受すべき普遍の生活・文化を吸収しながら、発揮されていくものとしての「自分らしさ」という点から実践的に深めていく必要があります。

(2) なかまとともに育ちあう生活の充実をめざして

子どもたち同士の生活の中で、遊びの輪が広がったり、気持ちを受け渡したりしながら、成長する子どもたちの姿に出会ってきました。私たちも、子どもの困り感や願いを、工夫をしながら、出来るだけ子どもたちの中に返していくことを大事に実践してきました。それは、人とかかわりを持ちたいという願いを子どもたちの中に見出すからです。

一方で、「人とかかわりが苦手であったり、人との関

わりを望みながらもうまくできない子どもたち」もいます。仲間との育ちをどう作っていくかという点では、一人ひとりの生活をていねいに観ていく必要があります。広汎性発達障害などの子どもたちや、これまでの生活でのいじめの体験や発達にふさわしい集団が保障されずに、貧しい友達とのかかわりのなかで人や集団を恐れたり避けようとする子どもたちや、子どものゲーム依存などの生活の課題を持つ子どもたち、そして、それらの課題が、家庭の貧困や孤立化などと複雑に絡み合っているケースも少なくありません。一人ひとりへの配慮や工夫をしながら、なかまと育ちあう寄宿舎生活をどうつくっていくのか、実践的な課題の一つです。

(3) 「豊かな生活」の内実を問いかけながら

(あらためて、子ども達の本当の願いにこたえる実践をめぐる)

私たちは、寄宿舎の生活をつくっていくときに「子どもたちの本当の願い」から出発することを大事にしてきました。子ども達の意見を探し出し、それを尊重しながら取り組みをしようとしてきました。それは、言いなりになるということではありません。子どもの思いを大事にしつつ、発達を保障する観点から子ども達の「あたりまえの生活」とともに作り出そうと考えてきたからです。今日の厳しい子どもたちの生活環境の中で、あらためて、それぞれの子ども達の「本当の願い」とは何なのか、子ども達の「発達に必要な生活」とは何なのか、子ども達の発達への権利を大切にすることは具体的にはどのような営みなのか、一つ一つていねいに論議しながら実践を進める必要があります。

同時に、子どもたちの願いを考えて実践していくときに、子どもたちが家庭や地域でどのような生活や遊びをしているのかをていねいに見ていく必要があります。発達に必要な暮らしが、貧困の中で奪われていることも少なくありません。生活の困難や貧困からくる課題を子どもや家庭だけにかえしていくのではなく、いっしょに乗り越えていく視点を実践の中に持っていく事が大切な課題となります。

(4) 子どもたちの過去と未来を結ぶ 縦と横のネットワークを構築しながら

今の子どもたちを取り囲む厳しさは、それぞれに複雑さと深さを持っています。子どもたちの発達や障害、家庭の孤立化と貧困、そういった意味では、学部や進路部と連携をしながら、将来にわたっては、地域福祉、医療とのネットワークを持つ必要があります。これまでも、そのようなネットワークを構築しながら進めてきたケースもありますが、今後いっそう大事にしていく必要があります。